

人間性の涵養 (四)

倉 橋 惣 三

人の好意を感じるのには、人間性のはじめである。人の間に生きた喜びが起り、人の間にあるぬくもりが得られる。たゞえては感謝となり、報謝のこゝろとなる。

人の好意に対する不感の原因は、自己耽婁にあり、自己高慢により、それから生ずる不満にあり、たかぶりにある。従つて荒怠不遜、分を知らない。人を見れば、我がためにあるものとし、求めてきわまるところないのである。というよりも、小さき好意に感ずる繊細の感覚を有しない。ときとしては、人の好意を感ずるは、己れのまけと思ひ、独力自尊、小さき肩を怒らせて、人の好意を拒む。

人の好意を求めて、与えられんことを希ひ、その得るところにたよらんとするものは乞食である。へつらいて己れを持せざるに至つては、人間の権威を欠くものである。しかも、小我の誇りをもつて、人の好意に対抗するは、正当なる人間の権威の尊重に似て非なるものである。測つて人の好意の多

少をあなどるは寧ろ慾の深きにいづるものである。人の小さき好意ごころを以て、己れを辱かしめるものとし、受くるの謙遜をつつかえずに至つては、強いて奮うに似る、人間失礼である。失礼というよりも、小さき好意に対する不感の小心である。誤つて、人の好意を踏みじらんよりは、自らの誇りをすてゝも、人の好意を生かすに若かない。感謝して、自ら求めざれば、自ら何んの耻づるところあろうや。好意は、ものではないごころである。一般のごころではない。彼れのわれに対する、人間としての特殊のごころである。人間交渉の親密なる具体のケースである。だから、それが一般のごころの形式に墮しては、なさけないのである。真実なる好意のみが、人間性のものである。すなわち、安心して受くるに足る。

幼い子供が、路傍の草花をとつて、仲間と与うごころを笑つてはならない。小さい好意のひらめきである。せんべいの

小さい一片をもち来るのを斥けてはならない。まじないの贈物ではない、屢々小さい親しみのしるしである。その純心を受くるに純心を以てすれば小さきものゝ小さき好意を、人間のことゝして生かすであろう。

人間のことゝしてという。しかも、ひろがれば天地のことでもある。そこに、好意的宇宙観や、好意的人生観が生れる因となる。

明るさと温かさに、常の心滿されずにおかない。箇々の感情、論理の結論、倫理の努力でなくて、その全生活の自然が好意から好意のものとならずにいない。その意味において、すべての善の芽が、その子に発芽せずにはいない。そして、人間自然の善の下地が耕され来るのである。これに比して、好意の人生観をもとゝしない人間の生活に、自然の善も生れるのである。

かくの如くして、人間性の涵養は、同年齢、同教養程度の同友相互の間に行わる。多くは、無意識の交渉の間に行われる。特に人間的というほど、顕著の情感、特殊の行動によらないのである。恋愛の人生において最も人間的なことである。しかも、特に甘美の人間関係たるを要しない。

恋愛とならざる恋愛的情感に幼児同志の親愛があり、又幼児に対するわれらの親愛がある。人間相互の最も柔軟なる触れあいとして最も人間的なまゝしさをものである。というのは、人間性のさざなみは、一方から他方への波及でなく

て、相互の間に、立つともなく行われるものである。人間性の教えというとき、屢々、一方から一方へ行われてゆくことのように考えられるのは、甚しく、その態度に反することである。特殊の愛情や被愛の人性性を、人間性の特色として挙げざりし所以である。

人間性は、言葉として何となく特殊めくか、極く平板平常の人間生活に外ならない。決して、仰山する興奮を意味しないものである。だからうれしい。

x

x

x

x

x